

井上広次常務が社長就任

中央ばね 工業 多様なばね製造に注力

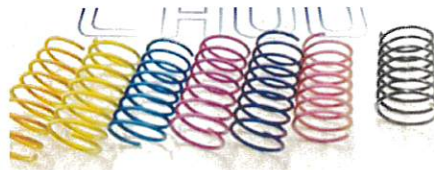
中央ばね工業(株) (千葉県柏市、井上英博社長) は昨年9月に井上広次常務取締役が新社長に就任。10月には試作・特殊形状品製造用に「コンピュータ制御スプリングフォーミングマシン」「MX-10」※(板屋製作所製)を導入しており、井上新社長が取り組んできたチタン・アルミ・ハステロイ・タンクステンといった一般的な鉄・ステンレス以外を材料とした「異素材ばね」や「樹脂コーティングばね」「微細ばね」の製造に更に注力して高付加価値化を目指している。



昨年10月に導入した「MX-10」と井上社長



アルミ合金ばね※アルマイト処理



チタン合金ばね※酸化発色

井上広次新社長は井上一年生まれ。1995年12月、場を担当、2002年3月には総務担当として

ISO9001及び14001認証の文書作り・マネジメント・システム構築等に尽力、2005年には役員に就任し経理を担当。その間2007年には井上英博氏が社長に就任し、広次氏は常務取締役に就任。2019年には経理と営業担当を兼務し、今回の社長就任となった。

今回の就任は元々次期社長だった井上広次常務が昨年の時点で54歳であり、同社役員任期が5年間の為、次期役員会においての社長就任では60歳と還暦を迎えていることから時期を鑑みて決定となった。

井上新社長は営業担当だった時期から鉄・ステンレス以外を材料としたばね製造に注力。最初は様々なユーザーから「チタン製のばね」として要望があり、純チタンでは加工が難しい為ニッケルチタン合金を加工し提供していたが、そこからさらに進んでそれぞれの用途・要求を聞いていく。①耐食性、②非磁性、③導電性(電気抵抗の高さ)、④形状記憶、⑤軽量、⑥強度といったチタンの特長のどれかが必要という事が分かり、チタンでなくとも必要とする特長を持った金属で対応可能と判明した事から、様々な金属製ばねの試作・製造を始めた。

一例として前述の①耐食性ならハステロイ、②非磁性なら超非磁性のステンレス、③導電性ではチタンの代用が利かなくなつたが、④形状記憶ではニッケルチタン合金、⑤軽量ならアルミであり、さらに陽極酸化処理をすれば着色も可能に、またマグネシウムも含まれる、⑥強度ではチタンと同じ高耐食だが高比重なタンクステン等が該当し、加工して対応。これらを同社では「異素材ばね」と呼称し、製造ノウハウを蓄積してきた。その他にも様々な要望に対応しており、ばね性から、鉄・ステンレスを素材とした場合に近いコストの要望向けとして樹脂(主にポリエチレン系)コーティング済みのばね材を皮膜が損傷しないよう加工した「樹脂コーテ

ィングばね」では、必要に応じてめっきとは違う原色に近い着色も可能。また線径0.1mm以下極細線を材料とした「微細ばね」の加工も得意とし、材料はステンレスに限らずチタンやタンクステン、そして0.045mm径×0.045mm径の角線での加工実績も有する。

井上新社長としては、現在売上比率の約5%が「異素材ばね」「樹脂コーティングばね」「微細ばね」だが、これを近いうちに7%、その後さらに増やしていずれは50%に、売上高としても比率が50%となった時点で現時点の150〜200%に、しかし高付加価値を進める事は売上・利益の増加だけでなく、「顧客満足」と同時に従業員の待遇向上による「従業員満足」の両立を進める為でもあり、今後の少子高齢化・人材不足への対応も考えている。

その一環として広報活動にも注力。製品として動く技術の幅(加工範囲)として知ってもらう事を目的にメールマガジン配信や展示会出展し、設備投資としても昨年10月に「MX-10」※成型能力0.251・0.1mm径を導入。既に社内にある同シリーズ「MX-10」よりも細径の線材向きであり、「MX-10」を専ら試作用として、そこで得られた数値をはじめデータから他の機種で量産の方針となっている。